

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^{cm} 1 2 3 4 5

特258

484

大正十三年
五月二十一日

始



特 258
484



用
大坂府立総合資料館蔵



伊賀越道中雙六

目次

| | |
|------------------|-----|
| 沼津里の段 | 一六 |
| 同 註釋 | 一七〇 |
| ○ 伊賀越道中雙六筋書 | 一一三 |
| 押 繪 | |
| 平作住家(口繪)一千本松原(墨) | |



沼津の里平作住家

稽古説附本義太夫名曲全集

伊賀越道中雙六

沼津の里の段

およねは一人物思ひ心にかゝる夫の病氣我手で介抱する事も浮世の義理に隔てられ秋の螢の消残る佛壇の灯もほそばそと嵐にふつと氣の付娘

『奇妙に治つたと、様のあの疵、今でも敵の手が、りが知てから、あの病氣では思ひもよらず、ム、』

と心で點頭胸をすへ、灯の消たるは天のあたへ、夫の爲と拔足さし足探り寄、印籠取上立退く足躓く音に目覺す十兵衛思はず高聲、何者と裾をとらへて引とむれば、わつと泣入娘の聲平作も恟りし、起上つてもまつくらがり、およね、といひつゝ、さがす竈の埋火付木にうつし顔見合せ、

『娘じゃないか。旦那様か。何故に此有様、エ、何の因果で此様な情ない氣に成たぞいやい。コリヤ此親は其日ぐらしの物じゃけれどな、人様の物もじきなかぬすもと思ふ氣は出

さぬはいやい。エ、親の顔迄穢しをつた』

と、わつと斗に泣居たる。十兵衛は氣の毒顔、『銀を取たといふではなし、是には譯の有そふな事』

と、問れておよねは顔を上、『恥しながら聞て下さりませ。

様子有て云かはせし、夫の名は申されぬが、わたし故に騒動起り、其場へ立合ひ手疵を負、一旦本腹有たれど、此頃はしきりに痛いろく、介病盡せ共驗なく、立寄方も旅の空、此近所で御養生、長しい間に路銀も盡其貢に身の廻り櫛笄迄賣拂ひ、最前もお聞の通り、悲しい銀の才覺も、男の病がなほしたさ、先程のお咄しに金銀づくではないとの噂、燈火の消しより、あの妙薬を

四
どうがなと思ひ付しが身の因果、どうぞお慈悲に是申、今宵の事は此場切、お年よられしお前に迄苦勞をかけし不孝の罪、けふや死ふか翌の夜は我身の瀬川に身を投てと、思ひし事は幾度か、死だ跡でもお前の歎と、一日ぐらしに日を送る、どうぞお慈悲に了簡』と、東育の張もぬけ、戀の意氣地に身をくだく、心ぞ思ひやられたり。歎の端々つくくくと聞取十兵衛、

『コレ姉御そんならこな様は江戸の吉原で全盛の松葉やの瀬川殿じやの』

『ハイ。テモよふ御存』

『すりや瀬川殿の夫の爲に、ムウ〜』

と心の目算思案を極め、

『イヤ太夫殿、夫の手疵を治す薬ほしいは尤、それ聞ては進ぜたい物なれど、是は人の預物、此事は思ひ切つしやれ、今こなた衆の咄しの通り、わしも又恩を受た、サ其恩を受た人の爲に、いづれの寺でも苦しうないが石塔一つ寄進が仕たいが、何と世話してくださるまいか』

『それは御奇特結構な寄進でござります。何時成共お世話致しませふ、私も來年はかゝが年忌勸むる功德俱に成佛とやら、是非お世話いたしまするでござります』

『サどうぞ今度の下り迄、違はぬ様に頼みます、豫ての願ひに、

書付も此内に委しうござる』

と、金包取出し、『必ず頼んだぞや親子の衆、最早夜明に間もなし、随分無事に親仁殿』

と、立出れば平作も必お下り待まする、姉御さらばと斗にて、心に一物荷物は先へ道を早めて急ぎ行。跡に親子は顔見合せ、金取上て、

『コレおよね、随分大事にかけておきや、夜明迄は間も有、そなたも休みや』

と水入ず、見廻す傍に落たる印籠、

『ア、是は今の旦那のじや、定て尋てござるで有』

といふにおよねが手に取て此印籠はどうやら覺への有模様、ハテ合點の行ぬ、それは是かとよく詠め、

『ほんにそれよ、こりや澤井股五郎が常々持し覺への印籠』
ハテふしぎなと平作も金取出しよく見れば、

『金子三十兩、此書付は、鎌倉八幡宮の氏地の生れ、稚名は平三郎、母の名はおとよ、コリヤコレ 我子に付て置た書付』

『そんなら今のお方は私が爲には兄様』

『オ、我子の平三郎で有たかい。そんなら最前からの親切は、それとはいはず此金を貢いでくれた石塔代』ふしぎの縁と親と子は暫し軋れて居たりしが、およねは印籠手に取て裾

はせ折てかけ出す。

『コリヤ待娘コリヤどこへ』

「何處へとはと、様此印籠を持って居る、其兄様は敵の手が、
り追かけて股五郎が有家を尋ねしづま様へ」

「尤じやく、が我ではいかぬ、年寄たれ共此平作、理を非にま
げていはして見せう、我もつゞいて跡からこい、どの様な事が
有てもな、必出なよ、敵の有家聞までは大事の場所、木影に忍ん
で立聞せい、必とも、危忽すな、合點か、本海道は廻り道、三枚橋の
濱づたひ、勝手覺へし、拔道を」

と、子故に迷ふ三悪道、轉つまるびつ走り行。跡におよねは

身拵へ續いて出んとする所へ、折から來かゝる池添孫八、

『瀬川様か』

「孫八殿、よい所へござんした、今夜爰に泊つた客で、敵の手筋
が知そふな、詮義の爲に吉原迄と、様が行しやんした」

「イヤ、忝い、シテ其行先は吉原迄はよも行まい、何かの様子は
道にて聞ん」

と瀬川につゞく池添も足に任せてしたひ行。實人心さま
く、に町人なれ共十兵衛は、武士も及ばぬ丈夫の魂夜深に立
し獨旅、千本松にさしかゝる。オ、イ、と、杖を力に息すたす
た。

『申々旦那様、ヤレ〜 お早い足元』

『フウ、今呼だはこなたか、あはたゞしう何の用』

『イヤ、只今のお金を戻しに参じました、石塔料と名を付て大まいの金子三十兩、其日ぐらしのくも助に、下さるにも譯が有、又請まするにも譯が有、けれ共此金を請ましては、去人が立ぬ義理がござります、是をお返し申ますかはりに、あなたに願がござります、お聞なされてくださりますか』

『ハテ、一夜さ泊るも何ぞのやくそく、様子によつて頼れまい物でもない』と夕闇の夜の聲しるべ跡より、窺ふ池添瀬川、かたづをのんで聞居たる。

『シテ其頼の様子』

『ハイ、おつしやつて下さりませ、此印籠の主の有家を承はりたふござります、これを尋て知たい斗に、さま〜の流浪いたす人、それゆへ娘も廓を出て憂艱難、是を知るを本望成就娘につれて私迄、モシ此上の悦びはござりませぬ、二十や三十のはした錢で露命をつなく私が死る迄、安樂にくらされる程の三十兩、其金銀にかへての願ひ、七十になつて蜘蛛助が、こに叶はぬ重荷を持つ、それはまだ休もする、子のかはひと云重荷は、寝た間も休まぬ一生の苦痛を助ける薬の名、お前様も親御が有ば、子故には愚痴に成物じやと思し召やられて願ひを叶へ

て下さりませ、コレ申旦那様」

と、血筋と義理と道分石、わけて血の緒の三界に、踏迷ふこそ道理なれ。親の心を察しやり、

「ム、そふ有ふ、心底至極尤じやが是斗はどうもいはれぬ、おれも頼れた男づく、其方の人が大切なら、こつちにも又大切譬又有家を聞いても、命がなうては本望がとげられまい、そつちの内、落ちて置た主のない印籠の、其妙薬で疵養生、達者に成た其上では、望の叶ふ時節も有ふ親仁殿、ナそふじやないか」

と心のかけこ、一重明ぬ十兵衛が情の詞、

「サ、それ程お慈悲の有お方、逆もの事なら其薬の持主」

「イヤサコレ 悪い合點、此薬の持主は、其病人とは大敵薬」

「卅兩の其金敵の恩を受まい爲、戻したではないかいの」

「此持主の名をいへば、敵の薬で疵本腹、恩を受けてはまさかの時、切先がなまらふぞや、やつぱり拾ふた薬にして、心置なふ養生さしたがよきそふに思はるゝ」

と、聞て平作感じ入、

「ア、そふじや有た、エ、おまへ様は恐ろしい發明なお人じやの、そふ聞ましては申やうもござりませぬ、左様なら歸りましょ、旦那様おさらば」

と、云つゝ探つて十兵衛が脇差拔取腹へぐつと突立る。

「ヤア／＼／＼何とした／＼、コリヤ自害か、何故に誰を恨んで勿體なや」

と、うろ／＼涙驚く娘、聲に手當る池添が、泣音とゝむる響蟲草に喰付泣斗。平作苦しき目を開き、

「おりやこなたの手にかゝつて死るのじやはいの／＼、ヘテこなたとおれとは敵同士、しづ馬殿に縁の有此親仁を殺したれば頼まれたこなたの男は立、コレ／＼此上の情には平作が未來の土産に、敵の有所を聞して下されいの、外に聞者は誰もない、今死る者に遠慮は有まい、ふしぎに始めてあふた人、どふした縁やら我子の様に思ふ物、何のこなたにひけ取す様な事

此親が、サア此親仁が致しませうぞ、是が一生の別れ、一生の頼み、聞ず死では迷ひますはいの／＼、コレ拜ます／＼旦那殿』
と子故の闇も二道に、わけて命を塵芥、須彌大海にも勝つた
誠の親に初て逢、名乗もならぬ浮世の義理、孝行の仕納め、
『どこに誰が聞て居まい物でもないけれど、十兵衛が口から
いふは、死で行くこなた様へ餞別、今端の耳によふ聞つしやれ、
股五郎が落付先は九州相良道中筋は參州の吉田で逢たと、人
の噂』

「エ、忝い／＼／＼アレ聞たかイヤ誰もない／＼聞たは此親仁一人、夫で成佛仕ますはいの／＼、名僧知識の引導より前

生の我子が介抱請思ひ残す事はない、早ふ苦痛を留て下され』
親子一世の逢始の逢納め。

『親仁様』

『兄。エ、顔が見たいくく顔が見たいわい』南無
阿彌陀佛なむあみだくくと唱ふる十念十兵衛が、こたへ
かねたる悲歎の涙始終窺ふ池添が、小石拾ふて白刃の金合す
火影は親子の名残跡に見捨て三重別れ行。

沼津里の段註釋

〔付木〕 つげぎ。檜を薄くペラ〜に切つて其の端に硫黄を塗付けた物。火を移して他の物を
燃付ける用をなす。つい近年まで東京でも用ひてゐた。附木。ゆわうぎ。

〔わたし故に騒動起り〕 この仇討の起りは志津馬の父和田靱負の家に傳はる「正宗」の鎧刀を股
五郎が盗み出さふとした事から始まつてゐる。志津馬は股五郎に唆かされて酒色に身を持崩
し、松葉屋の瀬川と深い仲になつて、その遊興費のために「正宗」を質に入るまでになつた。
さう云ふゴタゴタから和田靱負は股五郎の手に掛つたので、志津馬は股五郎を討ふとした
が、股五郎は一門の出頭人澤井城五郎の後立て、鎌倉の圓覺寺に籠つてゐたのを靱負の高弟
佐々木丹右衛門が取押へに行つた時、志津馬も其處へ行合せて、亂刃の下に手疵を負つたの
である。

〔介病〕 看病の病氣を介抱すること。

〔長しい〕 長。

〔最前もお聞の通り〕 道具屋に家財を賣ふとして手附を貰つた所、品が足りないからと云ふので疊々でも持つて行かふとした。

〔才覺〕 金の工面。

〔東育〕 お米は江戸の吉原に居たので、東育といつたのであらふ。吉原の遊女は意氣地を尊ぶ所から「東育の張も抜け」といつたのである。

〔今度の下り〕 下りと云ふのは上方から江戸へ來ること。京都には皇居があるので、江戸へ來るのを下ると云つたのである。

〔理を非に曲げ〕 先方の言ひ分が正しくとも、理に叶つてゐても、それを無理に捻ぢ曲げて、此方の言ひ分を通して見せる。

〔三惡道〕 地獄、餓鬼、畜生の三道を云ふ。子供の爲には三惡道へ落るのも厭はずに苦勞する。

〔くも助〕 徳川時代に各地の驛路に徘徊して駕籠を昇き、又は荷物の運搬に従事した人足。一生を漂々として浮雲のやうに送るから雲助と云つたものか。或は街道筋に綱を張つてゐて旅客に駕籠をすゝめたり何かするので蜘蛛助ともいふ。

〔道分石〕 道路の二つに分れる所には其の方角を石に刻んで、右は何處、左は何處と行く先を示した石が立てゝある。それを道分石と云ふ。

〔血の緒の三界〕 子は三界の首ッ枷など、云ふ諺がある、血の緒の三界とは血筋を引いた親子と云ふ意味。

〔かけこ〕 他の匣の縁に懸けて其中に填るやうに拵へた匣。「心のかげこ」とは自分の心に蓋をして其の本心を人に明さぬといふこと。

〔發明〕 懶口。賢。

〔須彌大海〕 佛説に須彌山といふ山は天まで届くほど高いといふことだが、父母の恩はその須彌山よりも高く、大きな海よりも深いと云ふ意味。

〔前生〕 前世。平三郎は菰の上から人に遣つたので、現世では親子ではないが、前の世の親子であるといふ心。年寄の痛々しい感じが此の一言に能く表はれてゐる。

〔十念〕 浄土宗にて南無阿彌陀佛の六字の名號を信者に授けて縁を佛に結ばしむること。十念を授けると云ふ。また南無阿彌陀佛の名號を唱ること。

伊勢平三郎大進



庚申塚

沼津千本松原

平作は十兵衛の脇差を抜いて腹へ突刺した。

かうして死ねばお前さんの手に懸つたも同じであるから、そつちの顔も立つといふものだ、お願ひだから股五郎の有家を云つてくれといふ。淨瑠璃「子故の間も二道に、わけて命を應芥、須彌大海にも勝つたる誠の親に初めて逢ひ、名乗もならぬ浮世の義理、孝行の仕納めと……」

稽古本附義太夫名曲全集

伊賀越道中雙六

解題

伊賀荒木又右衛門がその妻の弟和田志津馬の助太刀をして、伊賀の上野に於て澤井又五郎の一行を討取つたと云ふ名高い話を仕組んだものである。又五郎と遊び仲間であつた志津馬は、吉原の遊女瀬川太夫と深くなつた揚句、お定りの金に詰つて股五郎を頼んで、家重代の寶物である「正宗」の鎧刀を質に入れたのが原で、志津馬の父和田頼負は又五郎に殺されてしまふ。志津馬は又五郎を追つて圓覺寺へ駆け付けた所、頼負の高弟佐々木丹右衛門は返り討になり、志津馬は亂及の下に倒れたが、漸う命を取留めて艱苦を嘗めた末に、又右衛門の助太刀を得て、辛うじて本懐を達する事を得た。

丸本は十段になつてゐる。主人公は荒木又右衛門である。作義は近松半二。

伊賀越道中雙六

鶴ヶ岡八幡

大永元年二月上旬、鶴ヶ岡八幡へ奉幣のため勅使が下りますので、管領上杉顯定は勅使御警衛の役目を仰せ付けられ、坂本に假屋をしつらひ、家中の者が一日交替に番を致して居ります。

此日は和田靱負の當番でございましたが、老體のこととて悴志津馬を名代として遣はしました。そこへ麻上下を着て入つてまゐりましたのは同じ家中の者で、父靱負の高弟、佐々木丹右衛門といふ人ですが、此人、年は若い分別の有る、至つて頼もしい人物なので、父靱負も其の爲人に惚込みまして、常々あの丹右衛門を兄と思へよと言はれて居りますので、志津馬も敬意を拂つて居ります程の人。

「拙者は非番でござるが、何分大切なお役目であるから、お案じ申してお見舞にまゐりました

が、さて志津馬殿、お手前様に少々耳觸りな事を申さねばならぬが、お手前様は御酒を上ると兎角身持をお崩しになるが、あれは誠に宜しくない、それに澤井又五郎など、御別懇になさるが、彼は性來心のねぢくれた人物であるから、彼様な者とは成るべくお交際なさらぬが宜し」と親切に言つてくれますので、その好意を有難く思つて居りました。

丹右衛門はくれぐれもお役目を大切にせよと云つて出て行きます。丹右衛門の出て行つた跡へ本庄屋定七といふ町人が来て貸金の催促を致します。勿論遊興費に使つた金でございませう。そこへヒョククリやつてまゐつたのは澤井又五郎です。此奴は管領顯定の昵近衆澤井城五郎の一門であると云ふのを鼻へ懸けて、何處でも我儘勝手にはざり歩きます。志津馬とは大の仲好して、呑み仲間、遊び友達であります。あの丹右衛門の言つた通り性根の善くない奴で、實は和田の家に傳はつてゐる「正宗」の銘刀を捲上げようと云ふ野心なので、吉原の遊女松葉屋の瀬川を身請する爲に質入させて、後は後で何とでも工夫しようと云ふので、定七か

ら五百兩借入る約束をしてしまひます。

そこへ又五郎の手引で、松葉屋の瀬川が忍んでまゐりまして、つひ差向ひで酒になりましたが、果は大切の御用も忘れて了つて、泥々に酔ひ倒れてしまひます。

やがて勅使のおいで、あると云ふ知らせが有つたので、丹右衛門は急いで來ますと此の始末ですから、呆れてしまひましたが、併しぐづ／＼して居ればお出迎への間に合ひませんから、丹右衛門は慌て、禮服を着替へて、志津馬の名代を勤めましたから、ぼろを出さずに済みました。

靱負屋敷

又五郎が正宗の刀を手に入れようとしたのは、實は一門の出頭人城五郎に頼まれたので、志津馬を唆かして到頭質に入れさせたのは宜かつたが、それを嗅付けた佐々木丹右衛門は、直

ぐに手を廻して正宗を受出して、刀は自分の所へ預かつて置きました。靱負は其の始末を聞いて、お咎めのない間にと云ふので勘當して了ひました。

靱負は子供に運のない人と見へて、志津馬の姉お谷は唐木政右衛門といふ浪人と出来合つて、自分から連れて逃げて了つたのが丁度四年あと、此頃になつて里心が付いたものか、連りと詫言を入れに來ますけれど、表向會ふ事を容しません。今日も泣付いて來ましたのを母が氣の毒に思つて、そつと勝手へ呼入れて意見をして居りました。母は後添であります、物の能く分つた優しい人でした。

又五郎がつか／＼と入つて來ました。チラリとお谷の姿を見て、態と忌味を云つてお谷の母を困らして居ります。靱負は病氣で引籠つて居りましたが、又五郎が見舞に來たといふので、座敷へ通りました。又五郎の父又左衛門は靱負より上席でありましたので、靱負は今でも鄭重に取扱つて居ります。

又五郎は見舞に來たのでは無かつた。實は正宗の刀が質に入つてゐるから、受出さふと思ふが、拙者にお譲り下さるまいかと云ふ。いや、あれは疾に受出して手元にあると云ふので、ギヤファン！ではお谷殿を拙者の妻に呉れまいかと難題を言ひますので、靱負は腹を立てまして、一々その不しだらを擧げて叱り飛ばした上、お手前は何者かに頼まれて彼の正宗を奪ひ取り、身共の家を取潰さんとする企みで有らふかと厳しく咎められましたので、又五郎は冷汗を流し、只管謝り入まして、實は拙者一門の者に頼まれ、千兩にて賣渡す約束でありましたが、左様の悪心はプツリと改めますに仍て、何卒御勘辨下さいと云つて、城五郎から又五郎へ宛た偽手紙を出して見せましたから、靱負は浮かと欺されて、燭臺の灯でツブ／＼と讀んで居りましたが、隙を見て又五郎が一太刀浴せますと、靱負は「國賊！」と叫びながら又五郎の眉間を切りました、脾腹を深く刺れまして、敢なく命を落しました。屋敷の中は上を下への混雑です。遅れ走せに丹右衛門が駆付けましたけれど、もう間に合ひません。

又五郎は大意で床ノ間の刀箱を開けて見ましたが、中は殻ツぼで、丹右衛門の預り證が一通入つてゐるばかりでした。残念に思ひましたが、何うも致し方ありません。屋敷を飛出してドン／＼駆けて行くと、高張提灯を立てた一隊の行列に出逢ひました。これは勅使をお見送り申す一行であります。辛ひに此の行列は又五郎一味の人々であつたので、その庇護の下に和田一家の追跡を通れました。

又五郎には一人の母が有りますので、それを城五郎に托して、自分は切死をする覺悟であつたのですが、もと／＼此の事件の發頭人は拙者であるから、お手前を見殺しにする譯には行かないと云つて、城五郎は承知を致しません。兎も角も一同で善後策を講ずる事になりました。

圓覺寺

野守ノ介を始め多くの昵近衆は上杉に楯を突いて、又五郎を庇ひ立いたしまして、一同圓覺

寺へ立籠り、討手を引受けようか、それとも此方から逆寄せして一泡吹かして遣らふではないかと云ふ評定です。然るに城五郎は才智のある男ですから、何も爾ら大騒ぎをする程のことは無い。實は斯ういふ謀計を廻らしたと云つて一同に語りますと、成程それは妙計だと云ふので何れも勇み立つて居ります。

上杉家では以ての外、悲り、又五郎の母鳴海を人質に取て、早々又五郎を引渡せといふ掛合です。もし渡さなければ鳴海は逆磔刑にされるかも知れないと云ふのです。すると城五郎から上杉家へ宛て、私の遺恨のために一國を騒がしては相済まんによつて、又五郎の身柄は速かに渡し申さふが、その代りには母の鳴海と正宗一口とをお引替に渡されたいと云ふ手紙を出しますと、委細承知を致したと云ふ返事が来ましたから、その事を一同へ話しますと、それは飛んでもない事だ、又五郎を渡したのでは我々の顔が立たぬと云つて喰て掛りましたけれど、ナニそれはホンの計略で、さうして置いて途中で又五郎を奪ひ返せば宜いではないかと云

ふので、一同は使者の來るのを待受けて居りました。

さて又五郎の身柄は何うするかと云ふに、何の途鎌倉へ置く譯には行きませんから、城五郎の指金で、九州相良へ落してやる事になつてゐるのです。その案内者として城五郎がへ出入の呉服屋で十兵衛といふのを附けてやる事に致しました。此男は町人でこそあれ度胸の据つた、腰ツ骨の強い奴ですから、附人としては實に持て来いと云ふ代物なのです。又五郎も十兵衛の面魂を見て悉く氣に入りまして、城五郎から貰つた南蠻傳來の疵薬を印籠のまゝ、十兵衛に預けて置きました。

そこへ遠見の者が駈戻つて来て、上杉家の使者が見へたと云ふ知らせ。網乗物一丁、供は僅か三人だといふ。ソレと云ふので一同は裏門へ廻りました。

上杉家の使者として佐々木丹右衛門は、又五郎の母鳴海を乗物へ入れまして、膽太くも唯一人でやつて参りました。相手方も城五郎一人であります。約束通り正宗の刀と母親とを引渡さ

ふと致しましたが、母は喜びません、たとへ悪人にせよ自分の生んだ子を殺したくはない、年を取った母親などは命を助けて貰つたとて仕様がなないと云つて潜然と泣入りましたが、二人の隙を見て、そこに有つた正宗を抜いて咽喉を突刺しましたから、丹右衛門は驚いて其の刀と共に又もとの駕籠の中へ押込んで了ひましたが、城五郎は承知を致しません、その正宗を此方へ出せと云ひますので、丹右衛門も屹となつて、又五郎に繩を打て出せと手強く掛合ひまして、正宗と又五郎とを引替へにして、圓覺寺から出てまゐりましたが、實に危い話でございます。丸腰で繩付になつた又五郎を引立て、駕籠を昇かせてやつてまゐりますと、待伏をしてゐた大勢がバラ／＼と現はれて、四方八方から打て掛りましたから耐りません、無茶苦茶に切倒されて了ひました。又五郎は何處へ凌つて行かれたか、行方知れずになりました。丁度そこへ志津馬も來合せまして、必死になつて争ひましたけれど、多勢に無勢、亂刃の下に切伏せられて既に命も危いところへ、若黨の池添孫八が駈付けて、漸々の事で追拂つてくれ

ましたので、一命だけは取留めましたが、世を憐く思ひまして自害しようと思つたので、姉のお谷に厳しく叱られます。

最前城五郎に手渡し仕た正宗は、實は偽物なので、母を介抱する體に見せて、駕籠の中で摺替へて置いたのです。然し城五郎は中々眼が利いてゐるし、それに鋭い男ですから初手に眞物を見せて置いたのです。また鳴海の自害しましたのも、實は丹右衛門と相談をして有つたのです。

丹右衛門は鳴海と刺違へて死ました。

沼津の里

吳服屋十兵衛は又五郎の一行より一足先に立ちまして、安兵衛といふ供を連れて、沼津の宿場近く來ましたのは、もうそろ／＼日が暮ようと云ふ時分でしたが、あとの立場へ忘れ物をし

たので、下男を取りにやりまして、ぶら／＼歩いてまわりますと、よぼ／＼した爺さんが跡を
蹤いて来まして、連りと荷物を擔がせて呉れとせがみますので、次の宿まで持たせて見ますと、
いかにも足元が危なッかしくて見てゐられませんか、到頭自分が擔いでやつて、その爺さん
の家へ寄つて煙草一服吸つて、ごろりと一休みしてゐると、幾らかで道具を賣る約束がして有
つたと見えまして、道具屋らしいのが遣つて来まして、家の中を見廻してゐましたが、これぢ
やア手附にも足りないから疊を持つて行くと申しますので、その旅人は氣の毒に思ひ、自分が
立替へて拂つてやりましたから、爺さんも娘も拜まないばかりに喜びました。

爺さんは平作と云つて、お米といふ娘と二人暮しですが、この娘は江戸の吉原で全盛を張つ
た松葉屋の瀬川でありました。夫の和田志津馬は長いこと疵養生をして一旦本復を致しまして、
旅へ出ました處、また病付いて、所持の貯へも無くしてしまひ、お米の櫛笄まで薬の代に替へ
て了ひ、今ではもう二進も三進も行かなくなりました。志津馬は程近い所に匿まつてあるので

す。

つい立ちそびれて十兵衛は一晚泊て貰ふことになりました。お米は十兵衛の持つてゐる印籠
に目を注げて、それを盗まふとしましたのは、別に悪い心からでは有りませんが、先程親父が生
爪を剝した時、あの印籠の中にある薬を付けたら、痛みも直ぐに癒つたので、だん／＼聞いて
見ますと、それは南蠻から傳はつた疵薬で、兎ても金づくでは買へない薬だと云ふことで、何
うかして其の薬を志津馬にやりたいものだと思つたのですが、哀れや十兵衛に見付けられて、
面目なさに泣倒れました。

十兵衛は一伍一什を聞きまして、さては此の女が瀬川太夫の成の果であるかと私かに哀れを
催ふしまして、いろ／＼なだめて遣りまして、實は恩を受けた人の石塔を建てたいと思ふのだ
が、何處ぞへ世話をして貰へまいかと云つて、大枚三十兩といふ金を預けて、まだ夜が明けな
いのに宿を發つてしまひました。

平作は金包を明けて見ると、幼名平三郎としてありますから、悔りしたの爲ないのでは有りません、あれは自分の生の子で、菰の上から人に遣つて了つたので、お米には實の兄であると申しますので、お米も悔り致しましたが、ふと見ると其處に印籠が落ちてありました。ハテ何處やら覚えがあるやうだと思つたのも道理、この印籠こそ澤井又五郎の所持品でありましたから、直ぐに追懸けて又五郎の有所を尋ねようと思すと、平作はお前では不可いから、私が逢うて是が非でも言はせて見せようから、お前は後から来い、その代り何んな事が有つても飛出すではないぞと固く言ひ含めて置いて、轉げるやうにして跡を追懸けました。そこへ丁度池添孫八が来たので、お米と一緒に跡を追ひました。

十兵衛は足の早い男ですが、抜け道をして来たので漸と追付きまして、いろ／＼とせがんで見ても中々いふて呉れませんので、平作は十兵衛の脇差を抜いて自害しましたので、不憫に思ひまして、又五郎の行く先は九州の相良であると云つて、お念佛を唱へてやつて、すた／＼行

つてしまひました。

平作は喜んで目を瞑りました。

又五郎の一行が大阪から船で發たうとしたのを噂かして、伊賀の上野を経て、志摩へ出て、あれから船路へかゝるやうに仕向けたのは、何を隠さふ呉服屋十兵衛でありました。併し義の堅い男ですから、熊と志津馬の手に掛つて倒れました。(をばり)

324

261

昭和四年八月十五日印刷
昭和四年八月十八日發行

解説
伊賀越道中双六

編者
玉井清文堂編輯部

不許
複製

發行兼印刷者
玉井清五郎

東京市神田區表神保町十番地

發行所

東京市神田區表神保町一〇番
電話神田二二三三三番
振替東京三二八番

玉井清文堂

(行印部刷印堂文清)

終

